



# ねっとわあく

No.41

特集

自分の生き方の中で  
介護とどう向きあって  
いきますか？

● P4~5

徳松 節子さん

仕事と介護と子育てと  
—パーフェクトでなくていい—

● P6~7

影山 皓一さん、井口 美代司さん

夫婦「お互いさまと言える家事・介護」

● P8~9

佐藤 登美さん

介護に「負のイメージ」を持たないで

● P10

後藤 仁さん

人とのかわりのある仕事を

● P11 取材を終えて

● P12 フォーラムシアターで  
ライフデザインを考えよう

● P13 本の紹介

● P14~15 静岡県男女共同参画基本計画  
策定に関する意見書

● P2~3 遙 洋子さん

あなたの介護は、  
もう、始まっている！

介護する側へのプレゼントは、  
自分の人生を生きること





ひとたび自分を取り巻く環境が変化すれば、  
生活は激変します。

その変化が親や配偶者の介護だったら？

今回は、より良く生きるために  
「介護」を視野に入れた  
生き方を探ってみました。

あなたは自分の生き方の中で  
介護とどう  
向き合っていますか？

## タレント・作家 遙 洋子さん

少子・高齢社会の中で、いずれ誰もが  
介護する側・介護される側に。父親を介護し、  
看取った遙洋子さんの介護をとおして発見した  
生き方や「フェミニズム」から切り込む遙流！  
辛口コメント！あなたは共感できますか。



遙 洋子さん

タレント・作家。大阪生まれ。昭和61(1986)年から関西を中心にテレビ・ラジオ、講師等で活躍。平成12(2000)年に「東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ」がベストセラーに。著書に「結婚しません」「介護と恋愛」「働く女は敵ばかり」

# 介護する側へのプレゼントは、 自分の人生を生きること

## 介護には成功も失敗もない

介護する側は、結構ヘビーですよ。介護でその人の人生を重く左右しかねない。最後のステージをいい形で締めくくってあげたいという想いがありますから…。

ただ、見送られる側の人生を考えると、介護される時期というのは総合的な人生の一部で、圧倒的に介護される人がどんな人生を送ったかというウエイトの方が大きいんだなあ…ということを感じた。

介護には成功も失敗もない。成功か失敗かは、介護される人の人生を越えないと思う。

介護をどれほど上手く出来たつもり

でも、「ああも出来た。こうも出来た」と悔いが残る以上、納得のいく介護はないんだというのが私の今回の発見で、それだけやっても満足のいく介護が出来ないのなら、そのことで自分を責めるのはやめよう！

介護する側の努力の幅より、介護される人がどんな人生を送ってきたかというの方が桁違いに重要だと思う。

仮に「あなた、なんのために生きてきたの」「一生辛抱だけやったね。一生やりたいことしなかったね」という人を見送ることの辛さを考えると、たとえ介護が失敗だとしても、その人が満足いく人生だったら「いい人生でよかったね。さいなら！」と見送ってあげられる。

私は、介護・恋愛・仕事、どれも両立出来なかったけど、そんな自分が許せるのは、父が十分に好きに生きたと見えるから…。

私の場合は六人兄妹の末っ子なので、父の介護、母の介護、そして次は…と介護からは解放されないと腹づもりができた。だからこそ介護をしないですむ合間、合間をより充実して生きていきたい。

たとえ自分の選択した人生がハチャメチャでも、「結婚しなくても、ハッピーだよ」とメッセージを送り続けたい

# あなたの「介護」は もう、始まっている！

し、それが人生を生ききることに必要なと思う。

介護される側から、介護する側への最大のプレゼントは、自分の人生を生ききること！

**感謝という言葉は  
トリックワード。**

**介護や家事が能力である以上、  
正当な評価が欲しい！**

当時、介護保険制度はなかったけど大阪には老人ケアシステムがあった。でも全部の条件から外れ、一切摘要は受けられなかった。

介護保険制度がはじまり、整っていくのはうれしい。しかし、家族から助けと声がでたら無条件で助けてあげるべきで、「困っている」と言っているのに公的機関を代表する第三者がやって来て、「困っていない」と認定して帰っていく。

いったい保険や福祉は誰のためにあるのか。介護認定を第三者なんかにして欲しくない！

制度を整えるにしても、それにまつわる見方、考え方、社会のあり方など根こそぎ変化していくように底上げしていかなければ、介護保険制度一つ入ったからといって女性のしんどさは変わらないし、充実したからといって女性が介護から解放されることはない。

家事労働については、能力や労働の評価にもつながらず、その理め合わせとして「愛」とか「感謝」という言葉できれいに

片づけられてしまう。また、介護ヘルパーの社会的地位づけも低い。家事労働が上手くても下手でも、能力と収入につながらない現在の段階では、家事労働の延長線上にあるヘルパーの仕事だけが、能力による賃金格差が出るとは思われない。

感謝という言葉ほどトリックワードはない。能力である以上、正当な評価が欲しい！

**やりたいことは、必ずやる  
それが人生を生ききるコツ！**

女性が家にいない社会だったら、在宅介護を前提とした介護保険制度は成り立っていない。今後、男性を介護に巻き込むためには、女性が介護の責任を一人で背負わないこと！

男性は、介護をいったん引き受けてもらえなかった時点で、不安を感じ、初めて介護を自分の重さとして感じてくれないなあ！というのが、あくまでも私の理想論！（笑い）とりあえず、一人で引き受けるのはやめましょうよ。

今までの人生、貫いてきたことは、その時、その時、やりたいことは全部やるということ。

私が老後をどこかの福祉センターでお世話になるのが、孤独死しているのが新聞に載ろうが、誰も胸が痛まない。好きに生きて、好きに死んだということのみんな笑って見送れる。

やりたいことは必ずやって、好きに生きる。それが人生を生ききることだと思う。

親に虐待を受けた娘が、夫に暴力をふるわれてきた妻が、いざ介護する時になって、ついその親や夫に暴力をふるう自分を抑えきれないという体験告白を新聞で読んだ。

ある日、あなたが突然介護される身に…、でも、急には人生の軌道修正も、人間関係の修復も出来ません。その時こそ、あなたがこれまでの人生をどう生きてきたかが問われるのです。その時では遅いのです。あなたの介護は、もう、始まっているのです。



### 「介護と恋愛」

女は女優、男はパイロットの卵。そんな2人が、NYで出会って恋をした。「帰国する、君に会いたい」と電話があった矢先、高齢の父のボケが始まる。ウンコとオムツ。その間をぬって続く仕事とデート。こうして、恋と介護に揺れ動く怒濤の日々が始まった…





# 仕事と 介護と 子育てと

徳松 節子さん (清水市)

徳松節子さんは、二十三歳のときアメリカに五年半留学。

帰国後は、短大講師、私塾の経営など一貫して

英語教育に携わってきました。その一方で、

静岡市にある日本語学校の学院長を十一年務め、

日本で学ぶ外国の若者を支え続けてきた女性です。

そんな徳松さんが、『介護』に遭遇したのは平成二年のことでした。



## 義母との同居

夫は石垣島の出身です。沖縄は家族の絆の強い所で、私たちも子どもが小さいときから、お盆や正月には必ず帰省していました。

平成元年、義父が亡くなりました。義母は七十歳の頃から頸椎が曲がり、体の動きが鈍くなっていたのに加え、義父の看病で無理が重なり、介護が必要になりました。夫の姉や妹と相談しましたが、二人とも教師をしていて、介護を引き受けられる状態ではありませんでした。半年ほど迷いましたが、体の具合もよく知っていたので、一緒に住もうと決心しました。平成二年一月のことでした。

義母は同居当初から全介護が必要な状態でした。私は働いていましたので月曜日から土曜日まで毎日九時〜五時、日替わりで数人の介護ヘルパーさんに来てもらいました。介護だけでなく義母のいろいろな話もぜひ聞いて欲しい、とお願いしました。その時の話をヘルパーさんが「徳松董自分史」という冊子にまとめてくれました。昔の沖縄の状況や若い頃の苦勞を知り、大変な人生だったなあ、とつくづく感じました。

義母は静岡にきて三年目から、完全に寝たきりになりました。私の年代の女性は皆そうだと思いますが、ヘルパーさんにあまり乱雑な所は見せたくない

# パーフェクトでなくていい。



アルバムを見て、介護をしていた頃を思い出す徳松さん

のです。毎朝五時に起きて掃除、洗濯、夕食の準備をしてから仕事に出かけました。ヘルパーさんが夕方五時に帰ったあとは、食事も風呂もトイレも家族で世話をしました。

長女は二十一歳、次女と三女は高校生、四女は小学生でした。娘たちはおむつの交換を始め、話し掛けたり散歩したり、よく手伝ってくれました。私の百の言葉より、そこに助けを必要とする年寄りがいることで学ぶことも多かったと思います。沖縄の話や戦争の話など、自分たちのルーツをおばあちゃんから聞くことができたのは本当によかったと思

います。また、一緒に生活することで、人が老いるとはどういうことなのかを知る機会にもなりました。夜は夫が看ました。仲の良い母子でしたので、息子がいつも横に居ることで、義母は安心していられたと思います。平成七年九月に八十七歳で亡くなるまで、六年近い介護でした。

## 介護の面々

四人の娘の子育て、家事そして介護をしながら、三十年間休むことなく仕事を続けてきました。その中で、私にとって優先順位が一番はず、仕事でした。私はアメリカの大学で学びました。六人兄弟の上から三番目の娘の私を、留学自体が稀であった昭和四十年代前半、よく留学させてくれたと思います。だから、勉強したことをどうしても無駄にしたくなかったのです。同時に、日本の英語教育に対する不満があり、私なりのやり方で英語教育をしたいという熱意もありました。その二つが仕事を続ける支えになっていました。

生まれた子どもは責任を持って親が成人させなければいけないし、全面的に介護が必要な老親に対しても、私たちは責任を負っていると思います。でもその責任をあまりに強く感じると、自分自身が無くなってしまう。私は幸い健康にも恵まれ、精神的にも太っ腹で、「案ずるより産むが易し」という感じの

超アバウト人間なので、乗り切れたのですね。

## これからの介護は…

振り返ってみると、義母の介護を通して自分の限界を見ると同時に、老いることの大変さを教えてもらったように思います。時には顔を引きつらせ、良い顔で介護できないこともあり、それは本当に残念でした。夫婦の問題、経済的問題など修羅場もありましたが、それはどここの家も同じでしょう。でもこの十年で、大分変わってきたと思います。介護保険ができて、個人が負担することが大変なので社会で共有しよう、血縁だけに頼るのはやめよう、という方向に変わってきたのは、うれしいですね。

介護の最中は、きれいなことではないことも多い。でも、お互いに我慢しないで、もっと積極的に配偶者や兄弟姉妹に話し、一人で抱え込まないことですね。最終的には、介護する相手を何とかしてあげたい、という気持ちが人を動かすのだと思います。その人を愛する気持ちが一番大事ではないでしょうか。あまりしんどい方ばかり見ないで、介護する人もされる人も良い顔で、湿っぽくならないできたらいいですね。私自身は基本的には、自分の一生は自分でけりをつける覚悟が必要だと思っています。最後まで独立独歩でいきたい、それが私の願いです。